

第十三回台湾李登輝学校研修団レポート

八田與一技師の墓前祭に初参列

本会事務局

佐藤 和代



八田與一墓前祭に参列
(5月8日)

十三回目となる台湾李登輝学校研修

団(服部香苗団長・川村辰子副団長)

は五月六日から十日の四泊五日の日程で開催された。参加者は北海道から福岡県、大正生まれから平成生まれまで幅広い年齢層の三十九名だった。

今回は五月八日に台南の烏山頭ダムを訪れ、八田與一技師の墓前祭に初参列、最終日には李登輝先生のご講義を拝聴する盛り沢山の内容だった。

第1日・5月6日(木)

台北県淡水のホテルで研修生がそろ。研修はそこより徒歩五分の群衆会の入ったビルの一室で行われる。

午後三時半から始業式があり、李登輝学校教頭の郭生玉先生より台湾語

で歓迎の挨拶をいただいた。

早速、最初の講義が始まり、講師はお馴染みの黄昭堂先生(台湾独立建国聯盟主席)で、「馬總統下の台湾の現状」。台湾が名実ともに独立国になるには、WTO(世界貿易機関)に加盟していることを基盤に他の国とFTA(自由貿易協定)を結ぶという道があるが、中国が反対してなかなか思うようにならない。黄先生は「台湾と日本がFTAを結べるよう、皆さん力を貸して下さい」と呼びかけられた。

一日目の研修はこれで終わり、一行は夕食会へ向かった。会場は北投にある「禅園」。元は特攻隊招待所で、温泉宿の雰囲気色濃く残した瓦屋根の日本家屋で、張学良が五十年間も軟禁

されていた所だ。研修生は創作料理のコースをいただきつつ会話も弾んだ。

第2日・5月7日(金)

薄曇りのこの日は午前中二つの講義を受け、昼食後には烏來の「台湾高砂義勇隊戦歿英霊記念碑」(通称・高砂義勇隊記念碑)へ参拝し、その足で台南に向かうという日程である。

まず呉明義先生(慈済大学人間学研究所招聘教授)の「台湾原住民の歴史」では、その発祥地、分布、略史、そして今日の課題へと話が進んだ。発祥地には海外、大陸、本地の三説があり、日本とは統治以前から貿易の繋がりがあったこと。原住民は正名権、言語文化権、土地権の問題を抱え、国の前途も案じていると知った。

次は、鄭清文先生(小説家・童話作家)の「台湾の文学」。文学は時の政府により方向性を決められる危うさもあるが、歴史的事実を後世に伝える役目も担っている。台湾文学は抵抗の歴

史の事実を写實的に、自分達がよく知っている郷土の生活を通して書かれたという特徴をもつ。研修生の質問は多岐に亘り、台湾文学の文字表記から発音記号にまで及んだ。

午後は高砂義勇隊記念碑に向かう。

この記念碑は台北県政府による撤去の危機に遭いながら、日本からの義捐金で守られ、故簡福源^{かんふくげん}理事長らの尽力で裁判にも勝っている。今春、記念碑の公園が完成した。この日は雨の中の慰霊祭。「玉泉」(台湾醸造の日本酒)と花束を碑前に捧げ、服部団長より祭文が奏上された。この碑を守る「烏来郷高砂義勇隊紀念協會」の周萬吉^{しゅうまんきち}・理事長代理と碑を建立された故周麗梅さん



黄昭堂先生 (第1講 5月6日)



吳明義先生 (第2講 5月7日)



鄭清文先生 (第3講 5月7日)



迫田勝敏先生 (第4講 5月9日)

のご長男の馬偕^{まかい}理牧・同会総幹事の両氏よりご挨拶を頂戴し、最後に記念碑の前で記念撮影、碑を後にした。その後一行は新幹線で台南へ向かった。

第3日・5月8日(日)

八田與一技師は昭和十七年(一九四二年)五月八日に亡くなられ、今年で六十八回目となる命日のこの日、烏山頭ダムで一日野外研修である。

お天気に恵まれ暑いぐらいの陽気。九時半頃には烏山頭ダムに到着した。八田與一記念館を見学後、「殉工碑^{じゆんこうひ}」に参拝した。この碑の周囲には、ダム工事のために亡くなった日本人と台湾人百三十四名の名前が亡くなられた順

に刻まれている。八田技師の細やかな思いが表れているといえよう。

堤防^{さんごたん}の階段を上ると視界が一気に開け、珊瑚潭^{さんごたん}とも呼ばれるダムが眺められる。やがて八田技師の銅像が見えてきた。足を伸ばして座り、物思いにふける様子の像である。午前中は烏山頭ダムの世界遺産登録推進運動の記者会見があり、台湾側、日本側の挨拶があった。日本側からは竹田恒泰氏、当会の柚原事務局長、片木理事が臨んだ。烏山頭ダムが世界遺産となれば、日台の深い絆が広く知られ、日台共栄のシンボルとなるだろう。

午後二時から墓前祭が行われた。墓前には祭壇が置かれ、果物と花が飾ら

れている。紅白のテントには多くの参列者が椅子に腰かけ見守っている。

まず三人の尼僧による読経、関係者による献花、焼香が続いた。日本からは八田技師長男の故八田晃夫氏夫人の綾子さんも出席された。また「八田技師夫妻を慕い台湾と友好の会」も参列した。馬總統代理の賴峰偉・總統府副秘書長も参列し「八田興一氏の功績と精神は台湾で永遠に伝わっていくと信じている」と挨拶された。

研修団一行も無事献花することが出来、よい思い出となった。一行は急ぎ淡水に戻った。

第4日・5月9日(日)

雨季に入ったせいかやはり小雨。今日は朝から講義が詰まっている。

まず李登輝学校を主催する群策会の紹介DVDと「台湾民主化への道」のDVDを鑑賞した。

次に、迫田勝敏先生（元中日新聞論説委員・開南大学講師）の「日本人ジ

ャーナリストが見た台湾」では、馬政権がECFA（経済協力枠組み協定）を締結すれば社会も変化し、政治統合も進み、中国化するだろう、と危惧を述べられた。中国では国を挙げて台湾へ買付団を送り込み、台湾側も中国へすり寄る態度を示している。中国へ統一されぬよう、日本も台湾の後押しをすべき、と締めくくられた。

午後は、羅福全先生（元亜東關係協會会長、元台北駐日經濟文化代表処代表）の講義「馬政権と東アジア安全保障の新課題」。今後十年の東アジア安全保障は中国の出方にかかっている。中国が国際ルールを守る責任ある大国となる方向付けを、日米は協力して中国に勧告すべき。勧告が効力を奏するには相応の軍事力が必要とする。またアセアンの民主国家の団結は中国の覇権主義を食い止めるので、日本もそのための努力をしてほしい、と述べられた。羅先生の示された解決のシナリオが実現することを切に願いたい。

この日最後の講義、黃天麟先生（元第一商業銀行頭取）の「台湾の経済とECFA」は、最新の統計を用いてのものだった。台湾と日本はアジア周辺国に比べ株価も下がり輸出量も大幅に下がっているが、これは中国問題である。人民元の切り下げで日本円とNTD（新台幣ドル・台湾元）が大幅に切り上げられ、台湾資金は大量に中国に流れ、日本も中国に投資し、東南アジア経済が失速した。とくに台湾と日本は痛手を受けているが、その原因に気付いていない。台湾が今後ECFAを結べば、台湾は経済的に中国に吸収されてしまう「周辺化」が起こるのである。日本は為替の修正に努めねばならない、と指摘された。

夕食会は、研修所から歩いて五分ほどの海鮮料理の「海中天」というレストランで。ここに「老台北」こと蔡焜燦先生をお招きして行われた。また友愛会や台湾歌壇の枢要メンバーの三宅教子さん、陳唐山・總統府秘書長（官

房長官に相当)の秘書を務めていた李登輝民主協会執行秘書の張葆源氏も同席された。蔡先生からは「李登輝民主協会」理事長就任のエピソードや、お得意の日本の歌などをお聞きし、研修生は夜の更けるまで楽しいひとときを過ごした。

第5日・5月10日(日)

いよいよ最終日。研修生はスーツを身を包み、李登輝先生の特別講義を待ちする。十時半、李登輝先生が研修生の前に姿を見せられた。

李先生は「苦境を打破し、未来を展望——台湾はいかにして世界の変化に対応すべきか」というタイトルで講義

された(本誌4頁参照)。

現在の金融ショックからいかにして台湾を守るべきなのか。李先生はご自身の著書を開いて、総統として実践した経済政策の数々を説明、政府として打つべき手立てを示された。

「新政府は中国に依存する経済政策を取っているが、最終的には国内の企業努力、政策の努力が必要。資源の所有者にとってみれば、グローバル化は一種の機会だが、人民にはリスクと脅威になる。政府はこの両者を考慮し、フランスのとれた状態を維持していく必要がある。台湾の経済自主性を高めること(エネルギーの自給率を高める等)、革新(イノベーション)によつ

て経済発展を促進することが大切である」と力説された。

李先生は「まだまだお話ししたいところがあります」と仰有られ、研修生もそれを望みながらも予定の一時間はあつという間に過ぎた。

続いて修業式となり、李先生から直接研修生一人ひとりに修業証書が手渡され、記念撮影となった。李先生は一人ひとりにお声をかけて下さり、その温かいお人柄に今回もまた感動の多い修業式となった。

五日間ともに学んだ研修生は別れを惜しみつつ、心には深い満足感を持って帰途に就いたようである。最後に関係者に心よりお礼申し上げます。



羅福全先生(第5講 5月9日)



川村副団長からのお土産を受けとる黄天麟先生(第6講 5月9日)



服部団長は蔡煥先生たちをお招きして夕食会を開いた(5月9日)



李登輝先生(特別講義 5月10日)